



胎児・新生児適応による搬送先選定例

(ある新生児科医師の個人的な選定方法)

	総合周産期母子医療センター									近隣の地域周産期センター				ネット外	その他	
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N		
早産児(22-23週)	○	◎	○	○	○	△	○	◎	△	×		×	×		他疾患を優先 他疾患を優先	直ちに生まれる可能性が低いときは、○以外の施設にいったん収容、分娩が近づいた時点で再搬送することも(ただし、間に合わないリスクあり)
早産児(24-28週)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		×	×		他疾患を優先 他疾患を優先	
早産児(28-週)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		●	●		他疾患を優先 他疾患を優先	新生児搬送が可能な週数ならば、近隣2次施設に収容し、出生後新生児搬送することも考慮
小児外科疾患疑い (CDH重症=ECMO)	×	○	○	○	◎	○	○	×	○	×		●	●	◎	◎	◎O大学
(CDH重症=ECMO)	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	△	◎	
(CDH中等症=NO)	×	○	○	○	◎	○	○	×	○	×		●	●	◎	◎	◎O大学
先天性心疾患 (HLHS)	×	◎	○	△	◎	×	○	×	×	×		●	×	◎	○	P病院、◎Iで分娩→Q病院
(HLHS)	×	◎	△	△	○	×	△	×	×	×		×	×	○	△	P病院、◎Iで分娩→Q病院
脳外科疾患疑い	×	○	○	○	○	○	○	×	○	×		●	▲	○	○	◎O大学、◎R大学 近隣施設に収容し、再転送することも考慮

上記が合併するときは、その組み合わせで判断
○:母体搬送、●:新生児搬送
空床がある施設を優先するが、必要時は○×にかかわらず交渉(特に分娩まで時間がある場合)